

創刊の辞

西村周三

公益財団法人年金シニアプラン総合研究機構理事長

【 記 事 情 報 】

掲載誌：年金研究 No.1 pp. 1-2 ISSN 2189-969X

オンライン掲載日：2015年12月18日

掲載ホームページ：<http://www.nensoken.or.jp/nenkinkenkyu/>

当機構の前身である「年金制度研究開発基金」では、1978年から1982年まで、通巻15号にわたり「季刊年金研究」を発刊していた。これは30年以上も前のことであり、今から思うと隔世の感がある。その後、学術研究のあり方や出版事情は、当時と比べて大きな変化があった。

とりわけ注目したいのは、学術誌における研究論文の掲載にあたり、査読制度を採用することが普及してきた点である。投稿論文を受けた段階で、これを第三者が閲読し、コメントを加えてよりよい論文とするという方式は、日本でもほぼ定着した。これは、とりわけ若手研究者の育成のために、意義のあることであると思われる。

さらにIT技術の進歩に伴う出版事情の変化は、紙媒体よりも、Web上での学術出版を大幅に増加させている。この方向も、もはや戻ることのない流れである。

当機構は、年金分野における日本でもっとも権威ある研究機関としての地位の確立を目指しているが、このような意図のもと、時代の変化を踏まえて、新たな装いで「年金研究」と題して刊行することとした。

年金の研究は、代表的な分野だけをとっても、社会保障との関連、雇用との関連、さらには資産運用に関わる金融的な側面と多岐にわたる。この三つの分野を総合的に俯瞰する目を養うためには、さまざまな分野の研究誌に目を通さなければならない。本誌は、これらの分野の、いずれの成果の公表も受け入れる方針である。本誌に多様な研究成果が投稿され、幅広い視点をもつための情報を提供する学術誌となることを期している。各方面からの投稿を期待する次第である。

さらに、純粋に学術的な研究だけではなく、年金に関わるさまざまな調査結果、研究関連資料も適宜掲載していくことにしたい。

私ごとで恐縮であるが、思えば旧刊「季刊年金研究」が上梓されていたころ、同誌は、日本の年金制度のあり方をリードする気鋭の人々の成果報告で賑わっていた。そしてそれを読む若い研究者たちが育成されてきた。私は当時の幾人かの名前の記憶を思い起こし、感慨を抱いている。

折しも創刊号では「人生 70 年時代にどう備えるか」というシンポジウムの記録が掲載された。30 年あまりの間に、寿命のいっそうの伸びだけではなく、少子化、経済の発展に伴う資産額の拡大、情報システムの進化によるさまざまな記録の「見える化」など、年金をめぐる環境には、激しい構造変化が起きた。

おそらく次の 30 年間にも、想像を絶する環境の変化が起きるものと思われる。こういった要素を取り入れ、本誌から時代をリードする研究成果が生まれることを期待して「創刊の辞」としたい。